

ヨゼフ・ミスリヴェチェク 《モテズーマ》 (1771、フィレンツェ)

オペラ《モテズーマ》は、アステカの支配者であるモクテスマ 2 世に関するスペインの歴史と年代記に基づいて、ヴィットーリオ・アメデーオ・チーニャ＝サンティ [《ポントの王ミトリダーテ》 K.87 の台本作者でもある] によって台本に設定されたヨゼフ・ミスリヴェチェクによる 3 幕のオペラ・セーリアです。

1. オペラの主題 (リブレットからの翻訳)

広大で非常に裕福なメキシコの帝国モテズーマ Motezuma [Montezuma, Moctezuma とも。日本での呼称はモクテスマ] は、この名前の選挙君主の二代目が統治しており、非常に有能で、最大限の慎重さを持ったキャプテンであるフェルディナンド・コルテス **Ferdinando Cortes** [エルナン・コルテス] が、北米のその地域を征服するために通過しました。その沿岸の人々との多くのやりとりの後、彼はその一部を小さな軍隊で鎮圧し、その一部を彼の作戦で同盟と友好に引き込み、ついにその君主の境界地帯に到達しました。

君主は外敵、異教の到着におおいに動揺し、君主制の終わりを予測した多くの恐ろしい占いや予言によって彼の恐怖は増大しました。したがって、フェルディナンドを彼の国から遠ざけ、彼を聴衆に認めさせないためにありったけの技巧や努力を惜しみませんでした。

それにもかかわらず、フェルディナンドは天の明白な好意によって最初にもたらされた勝利のおかげで、カトリックの宗教を拡大したいと思い、そして銃器と馬の目新しさによりこれらの野蛮人に恐怖を引き起こしました。またモテズーマに自分を宮廷で受け入れるように強制しました；かくして 1519 年 11 月 8 日にスペイン人はメキシコの首都に侵入しました。それは、共和国として持ちこたえながら、モテズーマを暴君とみなしていたトラスカレシ **Tlascallesi** [トラスカラ] の大軍団によって強化されたコルテスの軍隊によってでした。モテズーマはそのスペイン人フェルディナンドを非常に名譽に受け止め、取引を開始しました。しかしフェルディナンドは自らをスペイン国王の家臣と認めることをいとわなかったため、二人の間で、古代から抽出された特定の予測が広まりました。つまり、ケツァルコアル **Quetzalcoatl** [ケツァルコアトル] 君主——彼からメキシコ帝国が始まり、その後彼は東部の新しい土地を征服するために移動したと二人は認識していた——の子孫が法と政府を改正するために来るであろうということでした：しかし、宗教の点で彼には柔軟性がなく、彼の偽善の優しさによって頑固であると、フェルディナンドは感じました。すぐに、スペイン人に対する帝国の蜂起が続き、モテズーマに落ち度がないわけではないにしても、フェルディナンドは攻撃が失敗してしまわないようにと、事態が悪化することを恐れました。

しかし、彼自身の安全のために、——彼は実際に実行するのですが——皇帝を逮捕する決議をし、彼をスペイン人の地区に住むように強制しました。それは帝国宮殿の一つだったところでした。本当に驚異的な行動（またはスペイン人の勇氣）、またはモテズーマの出来事（そのような強力で誇り高い君主）、またはメキシコ人（好戦的な人々）、そして彼らの王の防衛に非常に熱心な決意の欠如を考えてみてください。

その後、モテズーマの将軍の逮捕で蜂起は終わり、他の共犯者と一緒に死刑を宣告されました。その間に皇帝を束縛状態にし、そうすることを許可したことで、コルテスに別の奇妙で大胆な機会が生じました。つまり起訴されたのは 4 人で、コルテスはモテズーマの命令を受け、モテズーマが自分の手で彼らを連れ去ることによって想像される不名譽への憤慨を和らげることができたとされたことです。

それ以外の点では、スペイン人はモテズーマに向けてあらゆる種類の敬意を表する世話をし、彼はそれらに非常に満足し、外観に彼の尊厳のすべての礼儀を保ちましたが、メキシコ人が君主の状態を見たり、それが実質的に何であるか、つまり——実際には緩い——投獄について知ることを許可しませんでした。それで結局、彼らは全員が一致して彼を解放し、そして可能であれば、彼が少し黙認しすぎたスペイン人を追い払おうとしました。

そんなトラブルが尽きることない国に行こうとし、策略を持って帝国を宣言したのは、イズタクパラパ **Iztacpalapa** [イスタパラパ] の領主であるモテズーマの甥でした。スペイン人は、彼らの地区が無数の人々に包囲されているのを知り、大きな危険にさらされていることに気付くでしょう。一方、モテズーマは退去せよという知らせに激怒しました。

彼らは激しく戦いました、そして、惨めな君主が地区の壁から反逆者に直面することを決心したとき、大砲とメキシコ人による火の果実が燃焼する恐ろしい虐殺が続きましたが、彼らの怒りは君主の面前でいくらか減速し、彼の甥は祈りと脅威と混ざり合い彼らの魂に少なからず作用したように見えました：しかし再び夢に戻り、そして新しい皇帝の占領支配への抵抗者によっても扇動されました。彼らは恐怖から絶壁へと一瞬で過ぎ去り、モテズーマは彼に対して彼の家臣たちの最後の気性を見ました。

多くの教訓が引き出され、やり直されたにもかかわらず、彼の側にいた人々の盾は、彼が途中で怪我をしないことを保証するのに十分ではなく、彼は半死で地面に倒れました。恐らく彼らの犯罪に怯えていた皇帝が倒れたことにより、メキシコ人は逃げ、そして、暴行が終わったとき、フェルディナンドは負傷者を助けるために機敏に走りました。しかし、モテズーマは自分自身に薬を与えず、死ぬことを決意し、裏切り者の罰以外は何も勧めずに、復讐と凶暴さに最後の息を吹き込みました。

アントーニオ・デ・ソリスによるメキシコの征服から引き出されたこれらのニュースで、現在のドラマが形成されましたが、作者はいくつかの状況を変え、さまざまな時期に起こったいくつかの事実を少し近づけ 1 つのアクションを形成し、時間の単位を減らしました。しかし、作者は情報入手に細心の注意を払いました。歴史的真相から逸脱したものは何もありません。幕はスペイン人の大潟湖 (せきこ) へのアプローチで始まり、メキシコの完全な征服ではなく、モテズーマの死で終わります。シーンは、一部は首都の近く、一部は首都の内部にあり、そこからその帝国の名前が付けられました。

詩はヴィットーリオ・アメデーオ・チーニャ＝サンティ、トリノ人によるものです。

2. 登場人物

モテズーマ：メキシコの皇帝。グァコツィンガの恋人、婚約者
グァコツィンガ：帝国の従属州の女王。モテズーマの恋人
フェルディナンド・コルテス：スペインの将軍
テウティレ：インディアン隊長。コルテスの援軍となっている
リジンガ：ガンツィケの娘。モテズーマの奴隷。テウティレの恋人
ピルパトエ：帝国の将校。リジンガを片思い



モテズーマ



グァコツィンガ

3. オペラ概要 (タイミングと写真は下記現代上演による)

【第1幕】

第1場：寺院

まだ煙が立ち上っていて、祭壇が照らされている寺院。モテズーマはそこで神託に相談していた。夜。上方には、宮殿の上を通り過ぎて止まるときにさまざまな異言を投げるといふ双頭のドラゴン。

第2場：モテズーマのレチタティーヴォ「わしはどこにいる？ どうしたのだ？」(3'42")

第2場：モテズーマのカヴァティーナ「ああ、神よ、暴君よ」(6'20")

第2場：リジンガのアリア「自分の立場が変わらないことは分かっている」(11'08")

第3場：モテズーマのアリア「わが胸のいとしい炎」(16'06")

第4場：グァコツィンガのアリア「多くの心配の海で」(22'50")

第5場：メキシコの潟湖

首都につながる整備されたメキシコの大潟湖の眺め。高く険しい山々の両側から、スペインの歩兵と騎兵隊がさまざまな道路を下る。テウティレが率いるインド人補助兵もいる。これらの人々が平原に到着すると、彼らはコルテスによって順に並べられる。コルテスは話したいという合図をして、軍の楽器の喧噪を止める。

第6場：コルテスのアリア「支配者に思い出させる」(33'52")

第9場：テウティレのアリア「残酷な怒りで武装した」(41'11")

第10場：モテズーマの住居

第11場：グァコツィンガのアリア「ああ、やめて、いとしい人」(48'55")

第12場：モテズーマのアリア「彼がわしを死に追いやったら」(53'34")



コルテス

【第2幕】

第1場：メキシコ市街のメインストリート。背景に見える宮殿に通じている。

第2場：コルテスのアリア「私の利益にならぬ」(1°03'08")

第4場：リジンガのアリア「不幸な父の屈辱を忘れます」(1°09'07")

第5場：一般向けの宮殿の大広間。

第5場：ピルパトエのアリア「帝国のことを考えなさい」(1°13'17")

第7場：モテズーマのアリア「いとしい人よ、安心して戻ってくる」(1°17'49")

第8場：グァコツィンガのアリア「非常識なプライドを抑えなさい」(1°23'06")

第11場：テウティレのアリア「操舵手たちは喜ぶ」(1°29'17")

第12場：回廊

第13場：コルテスのアリア「すべての影はあなたの心から始まるのだ」(カット)

第14場：グァコツィンガとモテズーマのレチタティーヴォ・アコンパニヤート「そして、神様、どう思いますか？」(1°36'30")

第14場：グァコツィンガとモテズーマのデュエット「ああ、あなたが私に忠実なら」(1°38'37")



リジンガ



テウティレ

【第3幕】

第1場：執務室 [リブレットにないリジンガのキリスト教の洗礼]

第3場：テウティレのアリア「岸から離れないでください」(1°48'12")

第4場：リジンガのアリア「私は恐怖に満ちています」(1°52'08")

第5場：スペイン地区の中庭

第9場：コルテスのアリア「私の剣だけで十分だ」(1°57'07")

第10場：モテズーマのアリア「心は落ち着きを願っている」(2°00'23")

[アリアを歌い終わったモテズーマをコルテスが刀で刺すが、リブレットにその指示はない。

バロックオペラの流れを汲むとすれば舞台上での殺人はありえず、報告だけにとどめるべき。演出の勇み足か？]

第11場：グァコツィンガのレチタティーヴォ「ここで私は最後の一人です」(2°03'52")

第11場：グァコツィンガのアリア「悲しみの影は」(カット)

第12場：円形劇場の形をした大きな囲い

第14場：合唱「勝利の剣の下に」(2°09'09")



ピルパトエ

4. 現代上演記録 (イタリア語歌唱、チェコ語字幕)

Motezuma: Jakub Burzynski / Cortez: Jaroslav Březina / Teutile: Tomáš Kořinek / Pilpatoe: Marian Krejčík / Quacozinga: Marie Fajtová / Lisinga: Michaela Šrůmová

Dirigent: Roman Válek / Režie: Michael Tarant / Scéna: Jaroslav Milfajt / Kostýmy: Klára Vágnerová / Choreografie: Pavel Mašek / Světla: Arnošt Janěk / Pyrotechnika: David Kubík / Orchestr: The Czech Ensemble Baroque

Nastudováno pro Hudební festival Znojmo 2011 | premiéra 16. 7. 2011 |

(作成：2022年6月22日、改訂：2022年7月17日、神戸モーツァルト研究会 野口秀夫)